刈屋さんちの安心野菜

八百屋新聞
特別号

刈屋さんちの
安心野菜

〒940-0145
新潟県長岡市
栃堀 2885-6

電話 /FAX
0258-89-7689

E-mail
kariya.br@gmail.com

ブログ
http://blog.livedoor.jp/kariyabr/

ツイッター
kariyabr

―籠屋新聞読者の皆様へ―

籠屋新聞ご購読のみなさま、はじめまして、刈屋兄弟と申します。今回我々の師である籠屋新聞社主稲垣尚友氏から、痴報ネットワークの一紙として籠屋新聞に小紙同封の栄誉を賜り、恐れ多くも寄稿させていただいております。

私たち兄弟はこの春から母の実家である新潟県長岡市栃尾という山間の地で、6反ほどの畑を借りて野菜を育てています。この地で百姓となって早半年になりますが、我々の未熟な技術にも関わらず育った野菜は大変美味しく、多くの方からご好評をいただいています。きっと縄文時代から人の住んでいた土地だけあり、土が肥沃なのかもしれません。昼夜の寒暖差が大きいからかもしれません。でも実のところ美味しい野菜ができる要因はよく分かっていません。

日頃、小紙では野菜をご購入いただいているお客様向けに野菜の生長過程、日々の暮らしなどを、新鮮な野菜とともにお届していますが、今回は特別号として私たちの自己紹介を中心に執筆しております。大先輩である籠屋新聞とともにご愛読いただけたら幸いです。

―はじまりのきっかけ―

栃尾にある母の実家は、16代続く農家です。私たちの祖父母は、先祖が切り開いた田畑を今日まで大切に受け継いできました。しかし、祖父母の次なる世代はみな都市部で働いており、農業を継いでいこうという人はいませんでした。東京で学生生活を謳歌していた私たちは、「農業従事者の高齢化」「農業の後継者不足」が社会問題として叫ばれているのを他人事のように聞き流していました。

そんなある日、大学の授業にスペシャルゲストとして山口の農業青年が颯爽と現れました。彼の眼には澱みがなく、嘘のない生き方をしている人だと直観的に感じました。堀江さんというその青年に惹かれ、山口県岩国市錦町にある彼の家に通うようになりました。堀江さんは全く農業経験のない中で家の田畑山林を活かしていくために兄弟で起業して、農を生業として生きている人でした。堀江さんと交流するうちに次第に、私たち兄弟も栃尾で、祖父母の跡を継いで農業をしようと思うようになりました。そして弟の将志が2年間、兄の高志が半年間堀江さんの家に住み込みで農業研修をさせてもらいました。

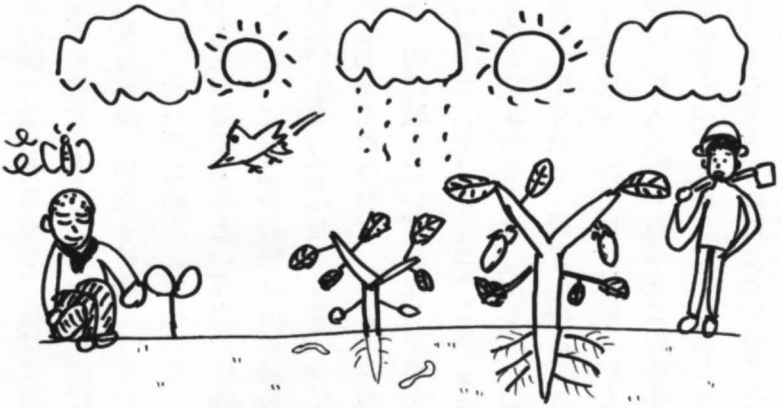
先に研修を終えた弟は、より広い世界を見ようと全国を旅し、兄は農業研修をしていたとき、東日本大震災が起こりました。悲惨なニュース、一方で動き出す復興へのエネルギーを前にして、私たちにできることは何だろう？　と2人で話し合いました。一時はボランティアとして現地に入ることも考えました。しかし東北・北関東の農業は、震災の被害のみならず福島第一原発の事故で大打撃を受けています。それなら被災地に近い新潟、しかも先の震災で全国から多くの支援を受けた中越地域から自分たちのような若者が立ち上がることに、意味があるのではないか？　と思い、予定を1年早めて栃尾で起業することにしました。

―野菜を育てる想い―

現在日本の多くの農家は、ただ野菜を作るだけで、どこで誰が食べているかを生産者自身はほとんど知りません。そんな生産者と消費者の顔の見えない関係、媒介者の過多が、食品の安全性・質の低下、中間コストの増加を生んでいます。そんな世の中で私たちは、まずは自分が安心して食べられる野菜づくりをベースに、自分たちの野菜を食べてほしいと思う人、自分たちの野菜を求めている人のために野菜を育て、お届けします。そして、おいしいものを食べたとき自然とほころぶ笑顔が、またとなりのあたたかい笑顔へとつながっていくことを願って、今日も畑に立ちます。

―農法について―

私たちにはほにゃらら農法という確固とした農法はなく、基本的には「野菜を育てる」よりも、「野菜に育ってもらう」という考えに立って農を営んでいます。野菜はあくまでも植物であり、水と光が「それなり」にあり、土が「それなり」の状態にある環境であれば育ちます。「それなり」とは多すぎず少なすぎず、暑すぎず、寒すぎず、乾きすぎず、湿りすぎず…それぞれの野菜がもつ性質・形態にあったという意味です。化学合成農薬、化学合成肥料など野菜の力を奪ったり、減じてしまうものは使わず、野菜が「それなり」に育つ環境を想像・創造していくのが私たちの農法です。



作：伊東美香

《野菜の販売について》

現在私たちの野菜は、新潟市内を中心に販売しています。毎週水曜日と土曜日に新潟市万代にあるピカリ産直市場トミーズ、毎週水曜日に同じく新潟市古町にあるむすびや百とmarilou店頭、毎週土曜日に地元栃尾の道の駅直売所にてご購入いただけます。また都内では青山アンデルセンと三宿にあるラ・テール メゾンにも不定期で野菜をお使いいただいています。遠方のお客様向けには来春より季節の野菜・山菜を詰め合わせた野菜BOXの販売を予定しています。もしご希望の方がいらっしゃいましたら、本誌表紙に掲載してある連絡先へご一報いただけますようにお願い申し上げます。

【人生の師―稲垣尚友―】

どうして私にとって尚さんは「人生の師」なのだろう？　私は文筆家でも竹大工士でもない。民俗に対する知識、情熱も特別もっていない。それでも尚さんは私にとって人生の師であるという思いは強い。きっと常識や貨幣経済に縛られない生き方なんだろうな。今私にはお金もなければ、一般的な意味での定職もない。しかし平然と（堂々と）日々を生きている。そうすると決まって人は心配して、お世話してくれる。尚さんがよく言うように「待っていればほしいものは手に入る」の意味をこの半年で身をもって実感した。人はどうやっても生きていけるということを教えてくれた人。それが尚さん。